

金子光晴
草野心平

日本詩人全集

24

新潮社版

日本詩人全集24

金子光晴
草野心平

昭和四十二年七月二十日印刷
昭和四十二年八月十日発行



価 330 円

Printed in Japan

1967・8

© M. KANEKO
S. KUSANO

著者

金子光晴
草野心平

編者

安東次郎
山本太郎

発行者

佐藤亮一

発行所

株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話(266)二二二 振替東京会

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

株式会社 大進堂

へ乱丁、落丁本はお取替えいたします

目次

金子光晴

金子光晴・人と作品

(安東次男)

二

鱧沈む

寒山寺

莫愁湖

虎丘

鮫

おつとせい

泡

塀

どぶ

燈台

紋

鮫

水の流浪

水の流浪

金亀子

章句

雲

七

六

四

三

三 三 三

三 四 七 七 四 四 六

女たちへのエレジー

ニッパ椰子の唄

洗面器

落下傘

あけがたの歌序詩

天使

落下傘

寂しさの歌

鬼の児の唄

卵の唄

鬼の児誕生

鬼の児放浪

恋

禿 禿

禿 禿 禿 禿

禿 禿 禿 禿

禿 禿

血

骨片の歌

業火

肌

鬼と詩人

昇天

鬼

蛾

蛾 I

蛾 II

蛾 III

蛾 IV

蛾 V

蛾 VI

蛾 VII

蠶 蠶 蠶 蠶 蠶 蠶 蠶 蠶

蠶 蠶 蠶 蠶 蠶 蠶 蠶 蠶

蛾 Ⅷ

球

玉

牡丹

湖畔吟

夜

雨

富士

三点

床

人間の悲劇

かなしい真珠採りの歌

——自叙伝について

山之口獏君に

女たちへのいたみうた

八

七

六

五

四

三

二

一

二〇

一九

一八

一七

一六

一五

一四

一三

一二

非情

アルビノス

太陽

葦

非情

★

日本人について

海と詩

リアルの問題

着物を剥がれた女達

★

解説

金子光晴年譜

(安東次男)

一〇九

一一

一二

一五

一九

二九

三九

四四

一五一

一六四

草野心平

草野心平・人と作品 (山本太郎) 一五

第百階級

序 (高村光太郎) 一七

秋の夜の会話 一八

ヤマカガシの腹の中から仲間

告げるゲリゲの言葉 一九

逆歯に死ぬる同胞一匹 二〇

鰻と蛙 二〇

いいのか 二一

青大将に突撃する頭の中の喚声 二二

蛙は地べたに生きる天国である 二三

蛇祭り行進 二五

春殖 二四

僵僕もいる風景 二四

ギケロ 二六

亡霊 二七

冬眠 二七

Beethoven: Spring Sonata

第一印象 二九

蛙になる 二九

後記 二九

明日は天気だ

子供に。 三〇

仲間ノ家へ 三〇

血の話 三〇

広州を去る直前 三〇

医者へ行く 三〇

風邪には風 三〇

母岩

芝浦埋立地にて

宇宙塵

久板卯之助の死

劫初からの時間の中で

ドストエフスキー

春

蛙

さようなら一万年

河童と蛙

青い花

祈りの歌

on the tree.

覚書

絶景

Bering-Fantasy

窓

猛烈な天

石

生活

空間

大ガラスの下

仏租界にて

上海挽歌

桃

富士山

作品第参

作品第肆

作品第質

三六

作品第拾壹

三六

作品第貳拾壹

三六

作品第貳拾貳

三六

日本沙漠

わが抒情詩

三三

日本沙漠

三四

土蔵

三七

浦安ニテ

三七

月蛾

三八

正倉院狩獵文銀壺

三八

誕生祭

三九

思ひは猛烈な羊齒類のなかに

四三

桂離宮竹林の夜

四三

るるる葬送

四四

ごびらっふの独白

四四

コウツ
古虎自伝

四四

ガリビラ自伝

四七

中華民国の藍に就いて

四七

牡丹圈

大塩盤

四五〇

牡丹圈

二五一

牡丹圈

二五三

宇宙線驟雨のなかで

二五四

岩手荒巻

二五四

上小川村

二五五

天

未来のはてから振りかえると

二五七

眠ってる肉体

胃袋

悔恨

冥

金魚

ばっぷくどん

第四の蛙

煙

Aコンドルの禿の由来

黒い蛙

李太白と蛙

しまったと今でも思う

蛇を呑んだ蛙

勝手なコーラス

二六

二五

二五

二五

二五

二五

マンモスの牙

〈私小説的な〉

雪の一日

肺結核に関する二つの作品

死

〈雨の円覚寺の椿〉

金魚

雲雀

雨の円覚寺の椿

〈沙漠と山と海のほとりで〉

夜の海

エリモ岬

年輪

二七

二七

二七

二五

二六

二七

二七

二七

二五

二五

鬼色の夜のなかで

二八〇

〈マンモスの牙〉

春
黒い山嶺から
王将のように

二九一
二九二
二九三

「火の車」のうた

満月の海に

二九四

デンシンバシラのうた

黙黙めぐる

二九五

南秋津

二九六

富士山

雲雀と富士

二九七

大王竜

半分の太陽

二九八

青銅の富士

無題

二九九

三疊紀

★
わが青春の記（抄）

三〇〇

三百の竜よ

ごびらっふの死

三〇一

赤富士

★

三〇二

秋

★

三〇三

マゲノリヤ富士

解説

（山本太郎）

三〇四

黒むらさきの

草野心平年譜

三〇五

天地氤氲

二九〇

金子光晴

金子光晴・人と作品

金子光晴、本名金子保和は、ちょうど日清戦争が終わったばかりの、明治二十八年十二月二十五日に、愛知県津島町に、大鹿和吉、同り、うの三男として生まれた。生家は土地代々の酒屋だったが、父和吉は若くから興業や鉾山に夢をいだき、家産をつぶして名古屋に出た。そこで親戚の女髪結いのもとにあずけられていた幼い大鹿保和を、建築請負「清水組」の名古屋支店長金子莊太郎の妻すみが、たまたま見かけて養子として引き取ったのは、金子の三歳のときだった。当時すみもまた十六歳の乙女妻であったというから、いわば人形のような気易さで貰い受けたものであろう。連れ帰った保和少年にすみは、さっそく友禪染の女の児の着物をきせ、髪もおたばこ盆や稚児髷ちごまげに結わせて育てた。家にはすみのほかに莊太郎の未婚の妹たちつまり二人の叔母がいたが、彼女たちはいっしょになってそういう保和少年におしろいを塗り玉虫色の口紅をつけ、おもしろがって外を連れ歩いたという。金子は、かなり異常で倒錯した幼年時代を送ったことになる。詩集『こがね虫』の中の、

ああ、盲目の蘆薈ろくわいや焚香ふんかうにむせびつつ、少年は嘔わらふべき見せ物であつた。
 (「金亀子」より)

というのは、もちろんその後の保和少年の性の目ざめに関わりのあることだろうが、この陰画的意識のそもその起りは、右のような幼年時代への一種甘酸っぱい悔恨にある。そのころ叔母たちの乳房のあいだにはさまれて見た影絵芝居のことを、後年詩人はつぎのように書いている。「風呂と称ぶ一種の幻燈器械で幕に映す彩色のあるうごく画で、福助がおじぎをしたり、牡丹に蝶が舞ったりという簡単なものであった。だが、その倏忽として、消えたり、あらわれたりする幻怪なまぼろしと、それをみてわれを忘れた子供心の感動を、いまでも忘れることができない。」（自伝『詩人』）

これはこの時代に育った者なら誰にでもある記憶のようで、じつはそうではない。紅おしろいをつけた女の児の姿で、ということはポジティブなものを取り戻そうとする潜在的欲求の中で、これを観たということが、そのうち金子光晴という詩人の資質を、作り上げてゆくことになるのである。

その後の保和少年は、養父の勤務の関係で京都ついで東京と移り住むあいだ、ゆがんだ性の目ざめ、ひよわな少年の虚栄がさせた盗み、家出など、金子のことばをかりれば「稚い罪の意識にさいなまれつつ、享楽と、日々の不安のなかで、明日をもしらぬおもいで生きていた」という異常な経験を重ねることになる。その無頼の少年が、これまた半ば虚栄と倦怠からかりそめの詩作に手を染め、いつしかそれが生涯手放すことのできぬ伴侶となってゆくまでの経過は、見ようによってはその詩作よりも実人生の方がよほど面白い眺めであって、その点、金子光晴という詩人のあり方は、明治、大正の諸詩人とは、そもその出発点からして大いに異なっていた。

「なにかが出发点でまちがっている。なにかのひどい犠牲になって、じぶんがここにいます。そういった感

じは、二十代のはじめからずっと僕の心をしめていた疑念であった。青春時代の異性との対決に、僕のよう
うに悲劇的に、苦行し、捨身して、いつさいを投げて立ちむかった愚者もまた、少いだろう。(中略)じぶ
んのことばかりしか考えていなかった僕は、彼女たちを毛すじ程も理解しようとつとめなかったし、彼女
たちは彼女たちで、じぶん達が僕をそんなに苦しめたことに気づかなかつたろう。ともかくも、そのとき
の失敗感、はなかく僕の一生に劣等感となつてのこり、僕が今日猶^{なほ}、ろくろくとして志をえないこと、こ
の人生が不平不満でいたたまれないこと、かんじんな土壇場でいつも、充分な自力が發揮できないことな
どにつながっているようだ。どんなに僕が上手に詩をつくれる時がくるとしても、それだけで償いがつく
とは考えられない。僕のやりたいことは別にあって、その機会は永久にのがしてしまった。文学者や、芸
術家でいくらくらくなつてもしかたがない。政治家や、軍人でもない。商人でも、冒険家でもない。僕は
ただ、絶代の美貌にめぐまれて、それが衰えぬ若さのあいだに死にたかつたのだ。それならば、恋愛すら
も、不要だつたのだが。」(『詩人』)

こういう金子が、後日、つぎのような詩を作るにいたつたとしても、それを世間を斜眼視するひねくれ
者の詩というわけにはゆかないのだ。

人を感動させるやうな作品を

忘れてもつくつてはならない。

それは芸術家のすることではない。

少くとも、すぐれた芸術家の。

すぐれた芸術家は、誰からも
はなもひつかけられず、始めから
反古にひとしいものを書いて、
永恒に埋没されてゆく人である。

たつた一つ俺の感動するのは、
その人達である。いい作品は、
国や、世紀の文化と関係がない。
つくる人達だけのものなのだ。

他人のまねをしても、盗んでも、
下手でも、上手でもかまはないが、
死んだあとで掘出され騒がれる
恥だから、そんなへまだけするな。

「偶」『屁のやうな歌』